マキアベリの国家論研究その2

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木田, 朝男, Kida, Asao メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00005248

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

マキアベリの国家論（研究その二）*

It is the first duty of political philosophy to examine the character of the state in its actuality rather than in its idea. It is not in what it claims to be, but in what effectively does, its real nature lies

(H. J. Laski, The State)

木　田　朝　男

1　国家の起源

マキアベリの現実主義と功利主義はその自然主義的国家観による。彼によれば国家は原始社会の人口が増加し，より大きな社会を形成する時に始まる。人びとは新しい社会の安定のために，みずからの利益のためにその中の最強にしてまた最も勇気ある人びとに支配されることに同意した。こうして政治社会の発足には権力の委譲が行なわれる。この原始「契約」こそ人間の善悪感の発達の最初の一歩を画する。正邪に関する普遍的信念は支配者が社会を支配し，組織するために制定した賞罰体系に由来する。善悪の観念がかかる起源をもつという事実こそは正邪は絶対的なものではなく，人間が社会の福祉にとって有害と認める行為を規制するという始原以来の絶えざる努力を考慮して判断されねばならぬことを意味する。

マキアベリはかくていかなる「永遠の法」(lex aeterna) も，それ故また自然法それ自体の有効性をも否定する。人間の善の直観は後世の人びとが考えたような神聖な秩序の啓示ではない。善とは多数者の生命，財産，名誉を最大期間保護することである。しかしマキアベリの自然法の否定は Marsiglio da Padova (1290～1343) の著，「平和の携護者」('Defensor Pacis' 1324) にはじまるイタリアの政治的リアリズムの伝統の継承に過ぎないといわれている。（注1.）その起源は政治的には皇帝（ドイツ）と法王との闘争が，学問的には中世後期の Nominalism の影響が考えられる。

マキアベリの利己としての善の概念は彼の意志論にしばしば見られるように一人と多数者の間の個有の緊張，それは彼の政治思想の主要概念である 'virtù' と 'fortuna' という両極性に反映している個有の緊張をはらむ。国家の成員は利己のために，その市民にみずからが善とする行動を求める。しかし彼およびその成員はすべてみづからの利己に走り，他人に対しては善の基準に反した行動をとるであろう。ところが利己は社会の病理であるばかりではなく，またその救治法でもある。利己は人間をその不変的側面では無政府主義的，また少くとも非社会的であると特色ずけることは確かである。しかし，もし人間に支配され，束縛されることを承認する寛容がなかったならば，少くとも利己の貪欲な，無限の追求から生ずる破滅的危険を思えば，今日われわれが生存しているのさえ不思議なくらいである。マキアベリの国家起源の神話はそれを背景として形成された。彼はこの利己の概念をその政治的考察，および支配，被支配の主要問題の分析のまさに中心に据えた。利己は社会分裂の不変の要素であると共にまたそれは社会結合の必要条件でもある。

人間は悪(利己的)であり，社会が人間を拘束するという点はマキアベリはホッブス(Hobbes)と同じである。しかしマキアベリはホッブス

*　昭和45年9月16日受理

よりもはるかに弁証法的である。ホッブスの根源的利己説は利己それ自体の弁証法による自制の可能性が殆んど考えられず，そのために彼は絶対主義体制の擁護に帰着した。マキアベリの混合政体礼讃は自由と理性の領域が社会に維持され得ること，社会の闘争意志はすべて各人のわずかの寛容によって相互に自制されれば，他人との間に緩衝地帯がつくられるという確信にもとずいている。（注２）即ち，もし人間はある程度の欲望の成果の享受が得られれば本来の無限の貪欲を抑制するであろうというのである。その可能性は人間性の悲観的見方に立ついかなる民主主義政治理論にも容認されるに違いない。さらに彼の国家起源論や人間観はある特定の政治体制を正統化するためではなかったらしい。ある種の社会秩序＝政治体制が可能でも有効でもないと同じく，またそれが他の体制にまさることはない。マキアベリの原始「契約」の神話はただ社会の起源を求め，社会秩序と徳性の起源を求め，社会秩序と徳性の起源を説明するためのものに過ぎない。

法律，正義，良俗，諸制度，これらはすべて弱者が強者の支配に同意した後，強者が制定した賞罰体系に由来する。その過程は被治者が支配者の意志に従うことを学ぶことによって少くとも従順が慣習となったという事実による。原始的腐敗と無法を抑制し，支配者の不断の圧政の行使の必要を軽減し，かくて真の市民社会の出現を可能ならしめるものこそこの慣習的服従の発達である。人間の徳性は窮極的には力に対する恐怖に由来するであろうが，国家はただ強制だけでは活動することも永続することも出来ない。もし真の市民社会が存続するためには法律と良俗が行なわれねばならない。正義は多数者の真の利益ではあるが，しかし人びとはこの正義を求め，かっこの正義の意味を認識しなければならない。（注３）

マキアベリの国家起源の神話は結局国家概念の分析―強制の二つの範疇―の前提である。この二の範疇とは力による外的強制と服従という自制の形態である。両者の一方が減少すれば他方が増大する。前者が最少になった社会こそ真の市民社会である。かくてマキアベリの言うように神話，慣習，宗教，宗教的または非宗教的虚構（fraus）さえもすべて力（forza）の強制にかわる道具になるであろう。

マキアベリの国家起源論の考察から先づ最初に気づかれることは，それがある特定の政治体制の擁護論ではないということである。後世のマキアベリ研究の歴史からも明らかなように彼は各種の政治体制＝政体を比較検討して，しかもそのいずれの長短をもわきまえていたところから見れば彼が特定の政治体制を擁護したとは当然考えられない。

このような体系的厳格さの欠如こそは彼の思想すべてに通ずる特色である。が，それは欠点ではなく，むしろ深慮のあらわれであると理解しなければならない。マキアベリは事物の生きた現実，あるがままの事物に関心をもった。文章は曖昧でも事物の真実に関する知識の引用は適切そのものであった。それは彼みずからの政治経験から判断された現実の諸国家の歴史から得られたものであったから。彼は歴史から多くの教訓を学んだが，最大の教訓は支配者が政治の行動指針として一つの政治理論に余り厳格に教条的にとらわれるならば，実際には破滅的結末に陥るであろうということである。マキアベリの思想の曖昧さは却って彼の熟慮の結果であろう。彼の所説はすべて現実的な政治行動の第一の条件は弾力性にあるという理由から理論的一貫性を拒否している。

彼はしばしば警句や実例の蒐集家のように書を読み，それは彼の著作に繰返し引用されている。それらの警句，実例はいずれも具体的で生新である。それは特定の状況から抽象されたものではあるが歴史の過程にしばしば繰返される同様な状況に適用されて，マキアベリが過去の歴史に学んだことは広く利用されている。

勿論マキアベリは過去の政治記録の一般化に関心をもったと同じ程度の理論的側面を見せて

いる。彼はいくつかの理論や体系を政治技術に導入しようと試みたし，また時には薄弱な根拠に立って政治行動の一般原則を公式化することに熱中したこともあった。彼が政治家の実践記録のみならず，政治行動の諸原則をも当時の人びとに公表しようと努力したことも確かである。しかし彼の歴史分析の情熱は抽象的，即ち理論的性格のものではなかったということは忘れられてはならない。彼は各種の国家の発達，構造の理解，それらの分類さえも興味がなかった。彼の偉大な努力と業績は歴史的諸条件によっていかに政治行動が左右されるかということの解明に集中された。

注(1) J. W. Allen, A History of Political Thought in the 16th Century, p. 452

注(2) マキアベリは最も安定した政治体制としてポリビオスの混合政体理論を採用した。アリストテレスは安定した立憲体制として法律的に定義された寡頭政治または貴族政治と民主政治の混合体を記している。ポリビオスの云う混合政体は君主政，貴族政，民主政から成り，これらはそれぞれローマ憲法のコンスル，元老院，人民に該当する。事実アリストテレスには混合政体というものはなく，それらの原則の混合体をもつ国家の解説である。また，ポリビオスは各政治単位が政治に協力し，互に他を牽制するに必要なチェック・アンド・バランスの理論をすすめている。J. A. Mazzeo, Renaissance & Revolution, pp. 128, 9 注. 19.

なお，マキアベリがポリビオスの著作を知らずして，どうして彼の混合政体理論を知ったかという考証は，F. Gilbert, Machiavelli and Guicciardini, App. pp. 320～22. に詳しい。ポリビオスの「歴史」の第六篇の知識はフロレンスのギリシア文献学者 Lascaris (Janus) に直接または間接に (Claude de Seyssel から) 得たらしい。

注(3) Disc., II, 2

II. 国　家　論

これまで新しい国家概念をはじめて示唆したのはマキアベリであり，その概念は彼の示唆によって出来たとか説かれてきた。しかし彼の著作のうちのどれがそうであったのか，あるいはどれもそういうことはなかったのか，これを断定することはむづかしい。一体マキアベリは国家概念，またはそれに類するものを持っていたかどうかは問題である。というのは彼は国家それ自体，および抽象的国家を考えたかどうかかなり疑わしい。彼が「国家とは何か」ということを考えたとしても，その解答はどこにも見出されない。真に彼が関心をもったのは当時の現実のイタリア諸国家であった。前節に述べたように国家の起源についても彼は素朴な観念しか持っていない。即ち，すべての制度（体制）は人間性の個有の欠陥のために腐敗する傾向があること，腐敗から新しい生成がはじまるから国家はすべてサイクル（円環）運動（ポリビオスの「政体循環史観」の影響）をする傾向のあることを彼は確信していた。彼は国家をひどく不安定なもの，即ち，破滅への道を歩くものと考えた。しかし，この考えは彼の思想とは殆んど無関係である。彼はただ政治団体によってのみ安全と平和が得られるという意味で国家を「必要物」と考えた。万人は平和的所有と恐怖からの自由を望むが故に強力な政府を切望した。しかし，これはあくまでも国家一般について述べたのではなく，主として当時のイタリア諸国家についての彼の国家観についてである。

もし中世政治思想個有の欠陥はそれが余りにも現実を無視し過ぎたことにあったとすれば，マキアベリの欠点は現実のみしか考えなかったことである。代表的な中世思想家は事物がいかにあるべきか，またなるべきかを考える場合に過去にいかにあったかを考えようとしなかった。また，政治責任の本質の解明に熱心のあまり現行法に制裁規定の不在にも気づかなかった。さらに，国家を神の目的に結びつけるのに熱心のあまり人間の目的を忘れていた。（注1）それには次の二つの理由が考えられる。まず中世の政治的世界は混乱をきわめていたので，これは黙殺して合理的世界の基礎づけに没頭するのが賢明であると考えられたこと，次に12，3世紀には国家はまだ未知のものに過ぎず，理想的，具体的国家があったとしても，それはキリスト教世界であったことであろう。しかし残念ながらキリスト教世界は現実の国家ではなかっ

た。それは敬虔にして憧れの楽観的想像の虚構であった。やがて15世紀末にはフランス，スペイン，イギリス，そしてイタリアにおいてさえも国家は明らかに現実のものとして出現してきた。それまで国家はかろうじてキリスト教世界につながれていたが今や両者の関係は危機をはらみ，まさに断絶にさしかかっている。当時の思想家がそれに関心をむけない筈はない。しかしマキアベリはスコラ学者達が築き上げて来た基礎の上に（自然法的世界観）自己の思想を構築することはせず，彼等を全然黙殺した。彼は基礎的問題を問わなかったのみならず，むしろそれは考慮に価しないと見たのである。

しかし彼の場合この問わないということは一つの哲学を意味した。彼は現実にあるもののみに関心をもつことをむしろ誇りにしていた。人間は現実には安全を求め，また習慣と憶病の動物である。あらゆる種類の政治が安全を求め，支配と拡張を求めるのは当然である。マキアベリは欲望を正当化して理性と同一視することには全く無関心であった。人間の欲望が合理的であるか，または合理化されうるかと問うことは無駄である。というのはどういう答が出されたとしても事情は少しも変らないから。人間はこれまで常にあったようにあるし，またあるであろう。国家目的とはまさしく支配者と人民が現にみずから求めるものなのである。人間は何故安全と権力を求めるのか。この問いに対する唯一にして十分な答は人間は完全に利己的存在であり，また永久に不平不満な存在であり，そのようなものとして人間がつくられているということである。マキアベリは人間の目的以外のいかなる目的をも眼中に入れなかった。また，いかなる義務をも認めなかったから義務にも全く無関心であった。それ故彼は政府設立の目的としては万人の欲する安全の達成以外には何ものをも考えなかった。

さて，不十分で不完全ながらマキアベリの諸著から国家概念を推測するにしても，それは彼の当時のイタリア諸国家の性格描写らしいものから推論するよりほかはない。まづ第一にマキアベリの国家は最も完全な意味の世俗的事物である。それはローマ教会，またはいかなる教会とも無縁であるのみならず，神またはいかなる宇宙目的（計画）とも無関係である。これらのものは未知，不可知，非現実的，または多分ただ無縁なものとして彼の体系から排除される。国家は宗教を必要とはするがその中の教会はすべて国家の道具にならねばならない。

更に国家は完全に個有の実体と考えられるので孤立的かもしれない。国家はまた道徳的にも孤立的である。それは外部の何ものに対しても全く義務を負わず，外交関係や国交問題はすべて附随的なものであるから。

国家の存在理由はそれが必要とされる以上の何物でもない。人びとは国家のことを心配することは決してない。自分のことだけしか気にかけない。しかし万人は自己の所有の安全を求める。しかもその安全がかろうじて得られるのはただ国家においてであり，ただ国家という手段によってのみである。国家は所有の安全を維持するための一つの勢力団体である。しかし万人はそれを最も強く求めるだけではなく更に彼等は現在の所有に不満足である。また，すべての国家は潜在的敵国を隣にひかえている実状から各国は権力の拡大をめざすし，また目ざさなければならない。権力こそは安全の手段であるから。権力拡大の不断の努力は直ちに破滅に陥いるかも知れない。そうではなくとも破局は必至である。国家はすべて腐敗する傾向がある。それは必然的に革命につぐ革命によって結局崩壊を免れることは出来ない。しかし一時的にはそれは活発な公共精神を発揮することができるかも知れない。人間の悪と無政府的傾向を止める最善のブレーキは宗教である。それ故，政府は秩序の維持に役立つ宗教は何でも，特に国家への奉仕を最高の義務と説く宗教を育成しなければならない。しかし，この場合に国家と神の意志とは全然無関係ということである。国家の宗教が「真理」であるかどうかは少しも問題には

ならない。

政府は評判をよくするように努力しなければならない。最も人気のよい政府とは所有の安全を完ぺきに保障するそれであろう。国力は他の条件が同じならば愛国心によってきまる。国家はそれ自身の市民の正規軍を持たねばならない。他国の市民に頼るわけにはいかない。国家に公共精神が溢れていれば一層その軍隊は強大となろう。最善の政体（政治体制）は全市民，少くとも大多数の市民に国政参加を認めるそれである。このような体制こそは必ず公共精神を増進する。民主政治（governo de' popolo）もまた一般に君主政治よりもはるかにすぐれ，また一層安定性がある。しかし明確な現状認識と目的のための手段の賢明な選択，断乎たる公共の福祉への意志こそが内部分裂を防ぎ外敵に抗して国家を永続させることができる。また，他の条件が等しければ最も均質な国家が最強であろう。最強の国家とは言語，習慣を同じくし，愛国心に目覚めた人口豊富なそれである。

以上に述べたところがマキアベリの描いた国家の主要な性格と言えよう。それは主として当時の国家についての記述的解説であること，および，それは何よりも当時のイタリア諸国家にあてはまることに気付かねばならない。これがそれ以前から長い間続いて来たイタリア諸国家と政治の姿である。彼はそれを無類の明晰さと正確さを以て描いている。しかも「君主論」「ローマ建国史論」執筆当時の1513年に国家をこのように文学作品なんかで書くことは非常に斬新さがあったに違いない。ローマ帝国滅亡以後，国家をこのように神秘的な啓示とも神とも無縁に単なる世俗的事物として正確に描いた学者は一人もなかった。

さて，それでははじめに述べたようにマキアベリの著作の中に国民国家の概念が見出せるであろうか。この国民国家という用語は曖昧な概念である。それ故この問題に答えようとすれば用語の使用に関する不毛の議論に陥いる危険がある。マキアベリが言語，習慣，および生活様式を同じくする被支配者を持つ政府の有利さに気付いていたことは明白である。これに反して一国の支配を言語，習慣を異にする人びとに拡大することの困難さを彼は強調している。（注2）さらに上述の両著のいずれにおいてもフランス，スペインはいずれもほぼ単一民族によって構成され，両国の国力の原因はそこにあることが強調されている。更に「君主論」の最終章にはイタリアは当然一つの国家であり，ただ政府を欠き，また外国人の追放が出来ないことを惜しんでいる。「ローマ建国史論」は近代イタリア共和国が古代ローマ共和政を復活出来るとの希望の下に執筆されたと言われる。彼が当時のイタリアを名実共に統一を失った自然国家と考えたことは確かである。彼は言語，習慣の共同体を以て国家形成の最善の基礎と考えたらしい。そう考えた彼がイタリアを一つの潜在国家と見たのは当然であろう。彼の言う健全な国家とは強固な公共精神に支えられ，個有の軍隊（armi proprie）をもって武装されたそれである。外国人の入り込んだ国に強固な公共精神も強力な市民軍も生れる筈がないことは明らかであった。彼は国家の強化の基礎として民族統一の概念を心に描いていたらしいが，それに明確な表現を与えた用語はどこにも見当らない。彼がイタリアは一つの国民国家になることを願っていたということは全く正しい。しかしそれと国民国家の概念とは無関係である。マキアベリはかってイタリアが政治的に統一されたことがあったことを知っているが故にそれは再び統一されるだろうと確信した。このような統一こそ外国の支配を防ぐ唯一の保障であると彼は考えた。また彼はイタリア人の間には強固な統一を可能ならしめるに足る共通性のあることも知っていた。しかし彼はそれ以上のことは言っていない。国民国家そのものの概念の形成は彼の思考様式には無縁であった。しかもこの概念は彼の言葉やその意味から容易に推測されるということも依然として正しい。

結局マキアベリの国家論は単なる解説以上のものであり，予見でもあった。彼はただ当時のイタリア諸国家のみならず16世紀のすべての国家の主要な性格を察知してこれを明確にした。それ故に彼の国家論はそれ以後の国家の性格が示したように近代国家の予言と云っても過言ではない。彼はある一定の条件のもとでは，たとえ現存しなくとも必然的に要請されるようになって来る事柄をよく察知していた。例えば彼は教会をイタリアの担った死骸と見て，それこそイタリア分裂の原因であり，世俗国家発展の障害となっていると云った。その後西ヨーロッパ諸国ではやがて教会と手を切ったし，手を切らなかった諸国もローマ法王から事実上独立するための政策をとった。かくてカトリック教国でも次第に専ら世俗的性格を強化している。また彼は国内の教会はすべて政治の手段となり，そうなるべきことを説いた。果して，ルーテル派の全ドイツおよびスイス，イギリスではその実験が行われた。彼は国家が宗教を必要とすることを強調したが，その必要は16世紀を通じて，一般には違った意味で痛感されたのである。また，政治の任務は個人（生命）と財産の安全の保障であるという考えが16世紀を通じて再び繰返し強調されている。マキアベリは国家は不可避的に権力の増大と隣人の支配を求めると述べたが，16世紀の諸国家の政策と行動は彼の考えた通りである。彼は隣国はたとえ現在の敵ではなくとも必ず強大になると見なければならぬと教えたが，16世紀の政治家は彼の勧告通りに考えることが習慣となった。かくて16世紀の外交の裏切り的な「マキアベリズム的性格」こそはもう一つの彼の見識の再確認である。たとえ「君主論」は実際にはトーマス・クロンウェル，カトリーヌ・ド・メヂチ，フイリップ二世，アンリー四世の福音書ではなかったにしても，少くともそうなったと信じても差支えなかろう。（注３）

16世紀の現実の国際関係はマキアベリの予言した通りになった。自然的または民族的国境線に到達する努力は次の世紀まではそれ程目立たなかった。それ故，他民族支配の困難さについてのマキアベリの警告は長い間殆んど無視された。それに対する認識がある程度生れたのはずっと後のことである。しかし彼の「愛国心」の重視はこの世紀を通じて学者，政府の見本となった。また，彼の政治行動における知性と意志の強固さの必要という主張は，たとえそれが彼の理想とする「民主」政治の反対派に利用されたにも拘らずこの世紀を通じて絶えず叫び続けられた。

かくてマキアベリの著作は無比の正確さをもつ予言と見てもよかろう。彼は少くともその後の一世紀間を通じてその必要を痛感されたことを殆んどすべて予期した。即ち16世紀の国家は宗教を絶対に必要とし，国家の統制する教会を必要とした。また，それは公共精神をも絶対に必要とした。しかもそれら相互の関係はますます緊密となった。また，それは内乱による分裂と共に外敵の圧迫に脅やかされた。実際隣人は常に危険であったので国家はそれ以前には見られなかった位強力な政治力と明晰な知性を必要とした。まさに生成しつつあった国家の要素に関するマキアベリの知見は全く驚くべき正確さである。彼をはげしく非難した人びとさえも心の中では同調することがあった。しかし，これらの国家の要素と彼の予言とは全く別のことであって，彼の予言がなくてもこれらのものは同じように必要とされ，また要請されたであろうということは注意すべきである。とにかく，その予言の正確さこそ彼の政治的考察の鋭さといってもよかろう。しかし，それは政治思想への貢献とは殆んど云えない。16世紀の政治思想はそれがただ明白にして緊急の要素を反映したということを除いては彼の予言とは異った道を歩み，違った性格をもっていたから。

マキアベリの思想の非中世的性格が指摘される場合とかく14・5世紀のイタリアの現実が忘れられがちであり，その傾向は一層ひどくなっているように見える。しかし彼の思想の非中世

的性格が云われることには真理がある。マキアベリの思想，思考方法，展望は16世紀の思想全体よりもはるかに非中世的であった。中世一般，および16世紀的な意味の自然法に対する不信，キリスト教に対する態度などで彼は全く孤立的であった。しかし，過去の事物に対する興味，その事物の直接の因果関係に関する興味，およびその際の帰納法の主張などはルネッサンスの新芸術，新文学と同様であった。例えばルネッサンスのイタリアで偉大な建築から彫刻が独立したのと同じくマキアベリは国家を教会から分離して国家を専ら地上の目的達成のための一つの勢力団体と考えたと云われている。（注4）

注(1) J. W. Allen, op. cit, p. 480
注(2) Princ., ch, 3, etc.
注(3) J. W. Allen, ibid.
注(4) J. W. Allen, ibid.

III. マキアベリのナショナリズムの性格

歴史と政治行動に関するマキアベリの輝やかしい研究，展望の広さ，さらに偉大なる勇気と結論に見られる現実主義はしばらくおいて二三の大きな誤りが指摘される。

先づ歴史的類比法はそれ自体冒険である。例えばマキアベリがよく当時と比較する古代ローマを，類比として使ったのは多くの点で誤りである。古代ローマの農業と軍事的偉大さの奇妙な組合せはルネッサンス期のヨーロッパ諸国の商業的基礎に立つ権力とは殆んど比較にならないのである。

次にイタリアの傭兵に対する悪口やイタリアの不幸の根源を傭兵に帰することもまた誤りである。それは彼の過度な一般化と過度な単純化に由来する。フロレンスはその経済的発達によって市民生活と軍隊生活とは全然区別されていたことは確かである。マキアベリは昔の市民兵制度の消滅を嘆（なげ）いた。それはローマの最盛期，即ち共和政期を通じて権力の支柱であったが，彼はこれと同じ制度がフロレンスにも同じように役立つであろうと考えた。しかし戦争技術がローマ時代とは全く変ってしまっていたので当時の国家は傭兵なしではやっていけないということが彼には分らなかった。当時の国家はすべて均衡のとれた軍隊を持とうとすれば，即ち当時の戦争に必要な各兵種，歩兵，騎兵，砲兵の正規の組合せをつくうらとすれば外国の職業兵士を雇わねばならなかった。それ故にイギリスはブルガンディの騎兵を雇ったり，反対にドイツとスイスはヨーロッパに歩兵を供給した。（注1）

イタリア諸国間の戦争はマキアベリの考えたような決して甘いものではなく，また傭兵隊長（condottieri）は必ずしも卑怯者でもなく裏切り者でもなかった。傭兵隊はしばしばその征服地に定住した。このように彼等は俸給の為だけでなく新しい移住地を求めて戦った。その指揮者は必ずしも冒険家とは限らず，しばしばその主君たる君侯の家族と縁故関係があったので王室の利益と密切な関係にあった。イタリアの軍事的不幸はこのような原因からではなくて指揮の分裂，国民的分裂および過度な政治主義に由来する。

このようにマキアベリの方法と態度には誤った判断を出したこともあるが他方では政治行動を実に明確に理解せしめるものがある。彼はロマンチックなナショナリズムが政治的思考に導入した混乱を免れていた。彼は国民国家が出現して，戦争がロマンチックなナショナリズムのシンボルとイデオロギーの名の下に戦われる国民戦争になる以前に活動し思索した人である。古い都市国家が近代国民国家にとって替わられようとする状況にあって，この伝統的な古典的国民国家＝都市国家はもはや政治権力の闘争単位ではなくなる時代に彼の分析によってその本来の姿がいかんなく復元されていると云えよう。

マキアベリの国民主義的偏見からの自由と関連してして次のことを忘れてはならない。即ちイタリアを野蛮人から解放せよという彼の偉大な勧告は国民主義的神話とは全然関係がなく，一人の情熱的なフロレンス人として，イタリア

人の自由を維持するために半島に一つの大きな権力の単位を形成する必要の確認に過ぎない。これらのイタリア人は正しく古代ローマの共通の文化的伝統を持っている。しかし彼等はいかなる意味に於ても一つの「民族」(folk) ではなく，マキアベリは半島および近接の島々のどれだけの人がこの大きい権力単位を構成するかについては深くは考えていない。

彼は進歩を全く信じないから彼にとって国民国家は進歩の道具ではなく，まして神聖な道具ではない。それは安全を達成するための一つの機構であり，また一体となるべき集団を統一または再統一した権力の総合である。イタリア人は古代の美徳 (virtù) が潜在していようと否とに拘らず，正しくローマ人の子孫であったし，みずからの幸福のためには統合すべきであった。事実マキアベリが「国民国家」(nation) に近いものを表現しようとする時には必ず 'provincia' という語を用いている。

真の「祖国」patria, 即ち nazione「出生地」はフロレンスの如き都市国家である。そして当時最も熱烈に愛国的感情が向けられたのはこの政治単位に対してであった。このような現象は現代のイタリアに強固な地域主義として残存している。しかし都市国家は当時の世界の変化に適応せず，危機に陥っているということ，および強固な地域主義は近代国民国家の超国家主義（ウルトラナショナリズム）がそうであるように平和と秩序にとっては有害であるということにマキアベリは気づいていた。

しかし彼は当時の国民国家の出現については少しの幻想をもいだかなかった。というのは国家はその大小にかかわらず本質的に侵略的，攻撃的な精力的活動団体であるから。マキアベリはまたローマが都市国家や小さな部族国家を併合して発達したという事実を知っていた。彼が国家をいかに考えようとも，それは必ずしも恩恵的なものでもまた人民の権利の擁護者でもないことは確かである。彼によればこれと同様な権力の法則は対内的にも対外的にも作用するが故に国家は対外的には非道徳的な法則によって動くが，対内的にはこれとは反対に倫理的であるとは彼には到底考えられなかった。本質的に無制限な権力の論理である権力政治の内部論理が支配者のすべての活動に作用する。

マキアベリのナショナリズムの本質の明確な評価に伴う困難さの一つは彼がしばしば同一用語で別の観念を表現したり，同一観念を異なる用語で表現するために使っているという事実にある。さらに彼の使う用語の意味さえも変化があった。それは特に 'stato' 即ち state の用語にあてはまる。'status', 'lo stato', 'l'état' これらのうちのどの用語も近代国家を意味したことは17世紀以前にはない。この用語の正統的，中世的用法としての「王国の基本条件」，「支配者の権利義務」または「支配者の大権（統治権）」という意味では彼は一般に使ってはいない。彼は 'stato' を「支配者が獲得し，保持し，維持し，喪失し，または他人から奪ったもの」という狭義の政治的意味をもたせて使っている。それ故この用語は次の動詞即ち 'acquistare' 'tenere' 'mantenere' 'togliere' 'perdere' と共に用いられる。'fortuna' や 'virtù' の意味がそうであるように彼の 'stato' の意味も一貫しない。しかしその意味は 'imperium' が基礎となっている。それに段階があったり，一人で一部しかもたないことがあったり，全権をもつこともあり得るのである。

かくて 'stato' は 'patria', 'nazione' 'città' などでも祖国または政治団体でもない。政治団体には彼は 'il vivere libero', 'il vivere civile', 'il vivere politico' のような用語をあてている。それ故に彼の政治技術は「国家理性」というような正義の理論をもたない。というのは 'stato' には倫理的判断を超越する国家の神話はなく，支配者を悩ますような将来に対する重い責任という意味も，その成員に超越する政治団体という意味もなく，公共の福祉という高尚な理論もないからである。（注２）

注(1) J. A. Mazzeo, op. cit, p. 116

注(2) Mazzeo, ibid.

The point really is that international organization cannot be built on the nation, or a combination of nations with national characteristics; it must have a different genesis.

(F. Tannenbaum)

Machiavelli on the State

Asao KIDA

Machiavelli's realism and utility rested on a naturalistic conception of the state. He denies the validity of any 'lex aeterna' and therefore of natural law itself. Machiavelli would have agreed with Hobbes that man is bad and society restrains him, but Machiavelli's smethed is far more dialectic than Hobbes's. He never uses his theory either of origin of the state or of the nature of man to legitimate society or any particular form of government. His myth of a primitive 'contract' is simply in the finding an origin for society and for explaining the sources of social order and of morality.

It has been said that Machiavelli suggested a new conception of the state. But it would be difficult to say what a reading of his writings might or might not suggest. Whether he conceived at all of the state as such and in the abstract, seems dubious. He was really concerned only with the actual states of his day. He had the idea that all institutions tend to corruption owing to inherent defects arising from the nature of man.

He conceived of the state as necessary in the sense that only governmental organization could give security and peace. But, in the main, he expressed ideas about the states of his own time rather than about the state.

Machiavellian state is, to begin with, in the completest sense, an entirely secular thing. The state is an organization of force for the maintenance of security of possession.

His account of the state was, after all, much more than a description: it was a forecast. He had perceived much of what, under the given conditions, needs must, if not exist, at least be desired and insisted on and striven after.

Finally we must not forget in regard to Machiavell's freedom from nationalistic bias that his exhortation to free from the barbarian has nothing to do with a nationalistic mystique but is simply the recognition of the need for a large unit of power in order to preserve the freedom of its peoples. For Machiavelli the nation is a mechanism for achieving security, a quantity of power which unified, or reunified, a group of people who ought to be one. He had no illusions concerning the then emerging nation state, for the state, large or small, is by nature an expansive, aggresive, and energetically active organization.